

手・腕・指・爪・肩・脇・肘を含む慣用句と比喻

佐藤智佳子・田口愛葉・中島葉子¹

1. はじめに

手周辺部の身体名称(手、腕、指、爪、肩、脇、肘)に関するメタファーについて、『日本国語大辞典』を資料として、掲載されている慣用句の身体名称の比喻について分析する。現代の若い世代に使用されている慣用句に考察対象をしぼり、手周辺部の身体名称が、比喻表現に用いられる場合にどのようなものにたとえられているのか考察を進めていく。また、その比喻表現に見られた特徴が、どのように日本の文化と関わりを持っているのか、考えてみたい。

2. 分類の方法

『日本国語大辞典』の「手」、「腕」、「指」、「爪」、「肩」、「脇」、「肘」の見出しに収められている、これらを句冒頭部に持った慣用句を対象にして、まず筆者3名の内省により、使用するものと使用しないものに分けた。1人でも使用または理解する慣用句は取り上げることとし、次のAとBに分類した。

A：身体名称に比喻があるもの

B：それ以外

Bには、慣用句全体で比喻となるもの、身体名称が、身体部位そのものを表していて、比喻が含まれていないものが入っている。

その次に、各身体名称の慣用句(以下、身体慣用句とする)が示す比喻の内容に

¹ 信州大学人文学部文化コミュニケーション学科 日本語教育学専攻 3年生。言語経歴は、以下の通り。

佐藤智佳子：0歳～18歳 秋田県湯沢市、19歳～20歳 山形県米沢市、21歳～現在 長野県松本市

田口愛葉：0歳～18歳 岐阜県益田郡金山町、19歳～現在 長野県松本市

中島葉子：0歳～11歳 長野県北安曇郡小谷村、12歳～19歳 長野県北安曇郡白馬村、19歳～現在 長野県松本市

身体名称のメタファーについては、平成15年度(2003年度)の現代日本語学演習 I の授業で挙げられた。本レポートは授業の総まとめとして書いたものである。

ついて分析していく。今回取り上げた身体慣用句はAに分類されたもののみで、Bのものは対象としていない。

3. 身体部位が喩えているもの

Aに分類されたものに関して、「手」をはじめとする七つの身体部位がそれぞれ何を喩えているかまとめた。喩えられているものが何かを考えたいうえで、以下に示す14の項目に分類した。分類結果と、その分類の理由を以下に示す²。

3.1 手段・方法

「手段・方法」をあらわしている身体慣用句は、「手」では23例、「指」では2例みられた。

【手】

- | | | |
|----------------------|--------------------|----------------------|
| ・手が上がる ⁴⁾ | ・手が良い ^① | ・手を打つ ^② |
| ・手がある | ・手が悪い ^① | ・手を易え色を易える |
| ・手が付かない | ・手に付かない | ・手を易える |
| ・手が付けられない | ・手に付く | ・手を尽くす |
| ・手が詰まる ^② | ・手も足も出ない | ・手を施す |
| ・手が出ない | ・手も出ない | ・手を回す ^{①②③} |
| ・手が無い ^{①②} | ・手もなく ^② | ・手を焼く |
| ・手が見える ^③ | ・手を失う | |

「手がある」を例に取る。『日本国語大辞典』では、「手腕がある。また、対策やたくらみをもつ。手練手管に通じている。」と説明されているが、対策やたくらみを持つことは、何かをするための方法を有していることであると言える。つまり、「手がある」の「手」は「方法」を喩えていると考えられる。また「手を焼く」の慣用句の意味は「処置に窮する」というものである。「処置に窮する」＝「処置の方法に窮する」と解釈すれば、これもまた「手」が「手段や方法」を表していると考えることができる。

² 分類、分析の担当者は以下の通り。

手：田口愛葉、腕・指：佐藤智佳子、爪・肩・肘・脇：中島葉子

³ 慣用句の後に付けられている番号は、『日本国語大辞典』の意味の記述に沿って、複数ある意味のうちの何番目かを表している。以下、慣用句の後に付いている番号はすべて同様のもの。

【指】 ・指をくわえる① ・指を差す③

「指をくわえる①」は「うらやましがりながら、手出しができないでいる。傍観する。なすことなく引き退く」という説明が与えられている。これは、「手段が」何も無く、その指をくわえる様から生じたのではないかと考えたため、「手段」に分類した。また、「指をさす」については、指さすという手段で悪口を言ったり、非難したりするという意味になる。そのため、「指をさす」という行為そのものが「手段」になるのではないかと考えた。

3.2 協力

「協力」をあらわしている身体慣用句は、「手」では15例、「腕」では1例、そして「肩」では2例みられた。

【手】

- | | | |
|---------|---------|---------|
| ・手が掛かる① | ・手を切る | ・手を付ける② |
| ・手が切れる | ・手を組む④ | ・手を繋ぐ |
| ・手が付く③ | ・手を添える | ・手を握る③ |
| ・手を貸す | ・手を携える | ・手を引く |
| ・手を借りる | ・手を出す②③ | ・手を結ぶ |

まず、「手がかかる①」では、それ全体で「情交関係ができる」という説明が与えられている。この全体の意味から「手」は人と人との関係を築くものの象徴として考えられている。「手をむすぶ」は「同盟を結ぶ」という意味である。同盟を結ぶことは関係を築き、協力することである。そこから、この「手」も「関係」や「協力」を表しているといえる。

【腕】 ・腕を組む②

「腕を組む」は、人と人がうでを組むことにより、団結を表し、協力することを表わしている。

【肩】 ・肩を入れる② ・肩を貸す

「肩を貸す」は慣用句全体で協力する、助けるといった意味であるが、もともと荷物などを背負う部位であった肩というところを貸すこと、つまりは助力することと考えられる。

3.3 仕事・手間

「仕事・手間」をあらわしている身体慣用句は、「手」では15例、「肩」では1例みられた。

【手】

- | | | |
|----------|---------|---------|
| ・手が空く | ・手が引ける | ・手を掛ける④ |
| ・手が掛かる② | ・手が塞がる | ・手を配る |
| ・手が詰まる① | ・手が回る① | ・手を加える② |
| ・手が届く② | ・手が焼ける | ・手を離れる |
| ・手が離れる①② | ・手に掛かる① | ・手を煩わす |

「手がかかる②」は、「手数がいる。手間がかかる。」の意味である。よく「手が掛かる子供」と言うことがある。これは、子供のためにする仕事が増える、手間がかかることを表している。また、「手が塞がる」は、やるべき仕事山積みで他のことを行なう暇がない時に用いる。

【肩】 ・肩を代える①②

「肩を代える」は、仕事をする場所としての「肩」と捉えているのではないだろうか。「肩を代える」は仕事をする場所、あるいは荷を負う場所などを含め、肩は仕事をたとえていると考えた。

3.4 技術

「技術」をあらわしている身体慣用句は、「手」は12例、「腕」では10例みられた。

【手】

- | | | |
|--------|-----------|----------|
| ・手が利く | ・手に乗る① | ・手を加える①③ |
| ・手が込む | ・手の内② | ・手を入れる① |
| ・手が早い① | ・手の内に丸めこむ | ・手を込める |
| ・手に乗せる | ・手も触れず | ・手を取る |

特に料理などについて「手が込んでいる」と言うことがある。「手が込む」は、主に「細工、技巧などが緻密である」という意味であるが、持っているだけの技術をその料理なら料理に込める、という意味があると言える。細かい技術を発揮するのは主に「手」であることから、「手」が「技術」を表すということが充分に言えるのではないかと考えた。「手に乗る①」は少し異なった解釈である。この意味は「欺かれて術中に陥る。欺かれる。」である。この慣用句の背景にはもちろん、欺いた人が存在する。欺かれた人は、この欺いた人の巧みな言葉なり行動なりに欺かれたので

あるが、欺いた人にはその上手い言葉や行動、つまり人を欺けるだけの言葉や行動の技術があると考えることができるのではないか。そうしたことから、この「手に乗る①」の「手」は「技術」とした。

【腕】

- ・腕が上がる①
- ・腕が利く
- ・腕が冴える
- ・腕が立つ
- ・腕が鳴る
- ・腕に縊（よ）りをかける
- ・腕を上げる①
- ・腕を振るう
- ・腕を鳴らす①②
- ・腕を磨く

腕を使うことによって技術を得ることができる。腕なしでは技術は得られないのではないかと考える。

3.5 能力

「能力」をあらわしている身体慣用句は、「手」11例、「腕」3例、「爪」2例、そして「肩」で1例みられた。

【手】

- ・手が抜けない
- ・手が見える②
- ・手に合う②
- ・手に余る
- ・手に負えない
- ・手に負える
- ・手の内⑤
- ・手を拱く④
- ・手を抜く
- ・手を伸ばす
- ・手を広げる

「能力」は、プラスの能力とマイナスの能力の両方を含んでいる。ひとつずつ例を挙げる。まずプラスの能力の例だが、これには「手を伸ばす」がある。「今までしなかった事をやってみる。勢力を広げる。」という意味の慣用句であるが、新しいことに挑戦する能力がなければやってみることはできない、と考えられるし、また、「手を伸ばす」ことによって新たな能力を得ると考えることもできる。よって「手を伸ばす」の「手」は「能力」と考えた。マイナスの能力の例は「手を拱く④」である。「手だしをせずにいる。何もしないで見ている。手をつかぬる。」という意味だが、見ているしかできないことを表しており、見ていること以外のことをする能力がない、と判断することができる。このことからマイナスの能力を「手」があらわしていると考えられる。

- #### 【腕】
- ・腕がある
 - ・腕がいい
 - ・腕に覚えがある

例えば、「腕がある」の「腕」は事を成す能力のことである。

【爪】 ・爪の垢を煎じて飲む ・爪を隠す

「爪の垢を煎じて飲む」は、「～(人)の爪の垢を煎じて飲ませてやりたい」のように用いる。お手本のようにであったり理想的である人物の能力や資質が、自分や話題となっている人物にも宿ればよいのに、という願望から、爪の垢からでもそれらが伝わってこないものだろうかという思いから出ているのではないかと思われる。「爪を隠す」の場合も、爪を露わにした状態では、その鋭さから強さが周囲に読まれてしまうという比喻である。爪は、その者の強さなどの能力を示すものとして喩えられていると考えられる。

【肩】 ・肩が良い

「肩が良い」は、スポーツなどにおいて、肩が強いために、肩を使って行う行動が優れている者のことをいう。能力を喩えていると考えられる。

3.6 場所

「場所」をあらわしている身体慣用句は「手」のみで、9例みられた。

【手】

- ・手に収める ・手に入る① ・手の者
- ・手に落ちる ・手の内⑥
- ・手に握る ・手の物②
- ・手に入れる① ・手の下①

「手に入る①」「手に入れる①」「手に落ちる」「手に握る」などは自分のものとすることであり、「自分」または「自己の所有」であると考えられる。そして「手」は、所有する場所としての「手」を表していると考えられる。

3.7 自分の力

「自分の力」をあらわしている身体慣用句は「腕」のみで2例みられた。

【腕】 ・腕一本 ・腕を貸す

「腕一本」であるが、これは「自分の腕一本で子供を育てる」のように、自分の力で成し遂げることが考えられるため、「自分の力」という意味が含まれるのではないかと考えられる。

3.8 人

「人」をあらわしている身体慣用句は「手」のみであり、6例みられた。

【手】

- ・手が要る
- ・手に付ける
- ・手にも足らぬ
- ・手が入る①②
- ・手に付く①
- ・手に渡る

「手が要る」というのは、「人手が要る」ということである。「手」のみで「人」のことも言っている。また、「手に付く①」「手に付ける」などは、部下になる、するという意味で使われるが、「部下になる」は「人の下につく」ことなので、これらの「手」も「人」であると言える。

3.9 態度

「態度」をあらわしている身体慣用句は「手」のみで4例みられた。

【手】

- ・手のうらを返す①③
- ・手を返す
- ・手のひらを返す
- ・手を緩める

「手」が「態度」を表しているとすぐ考えられたのは、「手のうらを返す①③」「手のひらを返す」である。意味にも「露骨に態度を変えるさま」とあるように、態度が180度変わったときにこの慣用句を用いることが多い。よって「手」のみでその人の「態度」までも表していると考えられる。

3.10 気持ち

「気持ち」をあらわしている身体慣用句は、「肩」で3例、「肘」で3例、「指」で1例、そして「脇」で1例みられた。

- #### 【肩】
- ・肩を竦める
 - ・肩を窄める
 - ・肩を張る

肩を「窄め」たり、「竦め」たり、「張った」りすることで、それぞれ肩身の狭い気持ちや、とぼけようとする気持ち、また気負ったり威勢のよい気持ちを表に表わすことができると考えた。肩という部位自体に、その者の内面的な気持ちを表現できる場所という特徴があるのではないかと考えた。

- #### 【肘】
- ・肘を食う
 - ・肘を食わせる
 - ・肘を張る②

「肘を張る」であるが、文全体で拒絶することを比喩していることから、「気持ち」を比喩するとくることができると考えられる。

【指】 ・指をくわえる

【脇】 ・脇が甘い

「脇が甘い」であるが、守備体制の整っていないさまから転じて、文全体で気持ちの緩んでいるようすを喩えているため、「気持ち」として分類した。

3.11 手の他の部分

「手の他の部分」をあらわしている身体慣用句は、「手」のみで5例みられた。

【手】

- ・手が早い③
- ・手を合わせる①
- ・手を打つ③
- ・手を上げる③⑤
- ・手を入れる②

「手が早い③」は暴力をふるうことであるが、暴力をふるう際に一般的に使うのは手のひらや拳である。「手」のみだと、手首から先のことだけではなく、腕から指先までも言うし、肩から先でも「手」と言う。しかし「手のひら」「拳」はそれを表すためだけの単語が存在する。にもかかわらず「手」という単語で表しており、換喩となっている。そこで「手の他の部分」という項目を立てた。この項目に分類した慣用句はすべてこの理由からである。

3.12 責任

「責任」をあらわしている身体慣用句は「肩」のみで、5例みられた。

【肩】

- ・肩が軽くなる②
- ・肩の荷がおりる
- ・肩が直る
- ・肩の荷をおろす
- ・肩が休まる

「肩が軽くなる」は、責任やそれからくる負担が軽くなることを表している。肩は、責任などを背負ったり感じたりする場所であり、肩が軽いことで、責任感や精神的重圧からの開放を表現しているのではないかと考えられた。

3.13 わずかな量

「わずかな量」をあらわしている身体慣用句は「爪」のみで、2例みられた。

【爪】 ・爪の先程 ・爪の先まで似る

「爪の先程」、「爪の先まで似る」である。前者はごく少量の事柄を表し、後者も、

ごく細かい部分や隅の一部分も残すことなく似る、といった意味で用いられる。

3.14 その他

「その他」は7例ある。「手」が3例、「肩」が3例、「脇」が1例である。(括弧内は身体部位が喩えていると思われる事柄をあげた。)

- 【手】 ・手を負う(傷) ・手が届く④(時期)
 ・手を負わせる(傷)

「傷」は「手を負う」「手を負わせる」の二つのみだが、意味でも「手傷を負う。負傷する」や「負傷させる」となっており、「傷」のことを言っている。また、深い傷を負ったときに「深手を負う」などとも言う。

「手」が「時期」を表すと考えたのは「手が届く④」のみである。意味は「ある年齢、時期などにもう少しで達する。その時がまぢかにせまる。近づく。」である。その時期に手が届く、と考えたことから、「時期」という項目を立てた。

- 【肩】 ・肩が軽くなる(痛み) ・肩を並べる(ものの上端)
 ・肩が直る(運)

「痛み」に分類されたのは「肩が軽くなる」であるが、これは、肩の重さが変わり実際に軽くなる、という意味ではない。凝りが解消されるなどして楽になったことについて言う。「(肩の)痛み」が軽くなることによって爽快感を感じることを示すのではないかと考え、この項目に分類した。

「運」は、「肩が直る」という使われ方であるが、現在頻繁に使用されるかどうかは微妙なところである。しかしこの表現では、肩自体が「運」に置き換えられるのではないかと考えた。

「ものの上端」としたのは「肩を並べる」である。身長や記録などの空間的なものまで、上端の部分がそろっている場合に用いるため、とくに「上端」を意識して比喩に用いられると考えられた。

- 【脇】 ・脇へ散らす(中央の両端)

「脇へ散らす」については、ある限られた空間をとらえた時に、中央に対してその左右の端のほうに焦点をあてて「脇」と言っている。したがって、中央に対してその両端を喩えていると考えられる。

4. 考察

上記の考察をふまえ、「手周辺身体部位の比喩分類表」を以下にまとめて示す。

〔表〕 手周辺身体部位の比喩分類表

	手	腕	指	爪	肩	肘	脇	計
穢・熾	23		2					25
協力	16	1			2			19
憚・稠	15							15
技術	12	10						22
能力	11	3		2	1			17
場所	9							9
自分の力		2						2
人	6							6
態度	5							5
気持ち			1		4	3	1	9
和物紛	5							5
責任					6			6
わか燼				2				2
その他	3				1		1	5
計	105	16	3	4	14	3	2	147

これによると、特に「手」の比喩表現の数が圧倒的に多いことが分かる。他の部位と比べて「手」が技術や能力を最も発揮する部位であるからであろう。Lakoff&Johnson(1986)は、次のように述べている。

しかし、換喩は単に指し示すための修辭的技巧ではない。理解させるという役割も果たしている。たとえば、「部分が全体を代表する」換喩の例で言えば、全体を代表できる部分はたくさんある。そのたくさんある部分の中からの部分を選ぶかで、全体のどの側面にわれわれの注意が集中されているかが決まるわけである。プロジェクトのためにいくつか“good heads”〈よい頭〉が必要だと言った場合、“good heads”を用いて“intelligent people”〈知能の高い人〉のことを指している。ここで肝腎な点は、部分(頭)を使って(人)を表していることよりも、むしろその人のもつ多くの特徴の中から、「頭」に関連したひとつの特定の特徴、すなわち「知能」をとりあげているということだ。また、「手」は、単に「手」を表すだけではなく、肩から先の部分すべてを「手」

と捉えることがある。例えば、「賛成する・同意する」の意味の「手を上げる」では、肩から先の部分すべてをあげていることになる（挙手）。「手」がその周辺部位をも表すことがあるため、それが「手」の比喩表現を増加させる原因となっているということも言えるだろう。

「手」周辺部位が喩えているものの特徴を挙げると、「能力」を比喩している部位が「手」「腕」「爪」「肩」と、四つにまたがっている。これは、指先や手先の細かい動作、腕や肩の大きな動作を含め、肩から指先までの「手」全体が、「能力」の発揮を表現するのに一番適しているからである。つまり、どんな能力を発揮するにも、「手」なしではできないということである。

また、分類結果から、「手」周辺部位は、「気持ち」などの精神的なものを表していることが分かった。例えば、「肩」を用いた表現で担われていた「責任」は、それを重く感じたり、それから解放されたりなどという個人的な感情が関わっている。「手」についても、「手を反す」というような個人の「態度」を表しているものがあつた。日本語の「手」が意味するものは、「手」でする仕事や「手」によって表される外面的なもののみではなく、内面的なものも含まれている。

5. おわりに

以上、「手」周辺部位をとりあげ、それぞれの部位が喩えている事柄について、おもに筆者3名の内省にもとづき分析した。その結果、「能力」や「仕事」など、14項目に分けられた。最も慣用語が多かつたのは、「手」であつた。「手」が最も技術や能力を発揮することができる場所であると考えられていることが分かつた。

今後の課題としては、「手」がなぜ、上で述べたものを喩えるようになったか説明することにある。すでに、「能力」「技術」などはそれらの発揮に「手」が欠かせないということが分かつたが、それら以外は喩えている物とのつながりがはつきりしていない。より複雑な、日本文化や習慣との関わりから、「能力」「技術」など上記以外の比喩が生まれたのではないだろうか。

また、「気持ち」や「態度」などの内面的なものや、「手段・方法」といったものは、直接「手」の働きとは関係が無いようにも思われる。それらがなぜ、「手」などの部位によって表わされるようになったのか、考察する必要がある。

さらに、「手」周辺部位が導き出す概念についても考えたい。野村(2002)は、以下のように日本語におけるコミュニケーションを、概念メタファーとして分類し、それぞれの項目について具体的な例文を挙げて説明している。

「言葉を話す/書くことは液体を発することである」

「言葉を話す/書くことは液体を発することである」

「言葉の流暢さは液体の流れの速度である」

「言葉の理解しやすさは液体の透明度である」

「言葉を聞く/読むことは液体を受け入れることである」

「意味が言葉になる」

野村によれば、「音楽を流す」「音が漏れる」「声を絞り出す」「堰を切ったように話す」「読み流す」など、日本語において、ことばが液体として概念化されていることが分かる。

ここで取り上げた「手」周辺部位が、どう概念化されているかまだはっきりと見えてはいないが、「手」周辺部位が喩えている「能力」や「技術」「仕事」などというものには共通性を感じる。したがって、「音声」が「液体」に喩えられるというように、「手」周辺部位についても、こうした概念がメタファーによって明確に表されると考えられるのではないだろうか。

【参考文献】

尼ヶ崎彬(1990)『ことばと身体』勁草書房

金水敏・今仁生美(2000)『意味と文脈』岩波書店

野村益寛(2002)「〈液体〉としての言葉」大堀寿夫編『認知言語学Ⅱ：カテゴリー化』
東京大学出版会

G. Lakoff&M. Johnson(1986)『レトリックと人生』大修館書店

【参考資料】

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語編集部(2001)

『日本国語大辞典 第二版 第二巻』小学館

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語編集部(2001)

『日本国語大辞典 第二版 第九巻』小学館

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語編集部(2002)

『日本国語大辞典 第二版 第十三巻』小学館